

ダイバーシティ推進委員会企画記事 「子育てパパ会計士の日常」第10回 子どものほめ方、叱り方(前編)

ダイバーシティ推進委員会 副委員長 竹中 陽介

皆様、早速ですがクイズです。例えば、自分のお子さんが小学校のテストで100点を取って帰ってきたとき、皆様ならどのようにほめてあげますか？

- A. 100点取るなんてすごいね！
- B. 100点取るなんて頭がいいね！
- C. 100点取るなんて、さすがお兄ちゃん（お姉ちゃん）だね！

さて、勘のいい読者の皆様はお気づきかもしれませんが、実は上記のほめ方はいずれも「不正解」で、子どもの教育に悪影響を及ぼす可能性があるそうです。「ほめているのに悪影響ってどういうこと？」と興味を持たれた方は、ぜひ続きをお読みいただけますと幸いです。

今回ご紹介させて頂く「自分でできる子に育つ ほめ方 叱り方」は、まさに子どものほめ方と叱り方にスポットを当てた子育て・教育方法に関する書籍となります。筆者の島村華子氏はオックスフォード大学で児童発達学の修士・博士課程を修了されており、専門分野としてモンテッソーリ教育やレジヨ・エミリア教育を研究されています。私は恥ずかしながらこれらの教育法をこの書籍で初めて知ったのですが、筆者曰く、いずれの教育法も「子ども一人ひとりを生まれながらに能力をもち合わせたパワフルな学習者

であるだけでなく、権利をもった一市民としてみなす」点で共通しているようで、こちらの書籍でもこれらの考え方を基礎とした子どもとの接し方が紹介されています。

ちなみに、本書におけるほめ方、叱り方の対象は3～12歳を対象とされています。それではさっそく目次から見ていきましょう。

- 第1章 親の声かけ次第で、子どもは変わる
- 第2章 自分でできる子に育つほめ方
- 第3章 自分でできる子に育つ叱り方
- 第4章 子どもとつながる聞く習慣
- 第5章 こんなとき、どうすればいい？Q&A

書籍のタイトルや第2章、第3章の章題にもあるとおり、「自分でできる子に育つ」というのがポイントのようですね。ほめ方、叱り方以外にも、子どもへの声かけの仕方や子どもの声を聞くことの重要性などにもスポットを当てられており、ほめ方、叱り方の具体的な例やQ&Aもたくさん示されています。

こちらの書籍より、今回の前編では「ほめ方」を中心に、子どもと接する

上での考え方のエッセンスや注意事項についてお伝えできればと思います。

(第1章 01「そのほめ言葉が、子どもの自主性を奪う？」より)
子育てにおける2種類の子どもへの接し方

①条件付きの接し方（条件付き子育て）

子どもの行動の善しあしによって、褒美や罰を使いながら愛情の注ぎ加減を調整し、行動をコントロールしようとする。

②無条件の接し方（無条件子育て）
行動の善しあしにかかわらず愛情を注ぎ、子どもの気もちに寄り添う。

(中略)

愛情をエサにする接し方を繰り返すと、ほめられたときに愛されていると感じ、逆にそうでないときには愛されていないと感じてしまうのです。

誰も子どもに対しては見返りのない愛情をもって接しているはずなのですが、子どもが言うことを聞かないときや逆に成長を期待するとき、ついご褒美や罰によるしつけを行ってしまいがちなものです。「愛情の注ぎ加減を調整」などと言われるとドキッとしてしまいますよね。条件付き子育てには、次のデメリットがあります。

（第1章 02「『条件付き子育て』の怖いデメリット」より）
条件付き子育てには、4つのデメリットがあります。

- ①短期的にしか教育効果がない
- ②条件付きの自己肯定感しかもてなくなる
- ③親子関係が悪くなる
- ④世代を超えて引き継がれる

この中で、私が特に気になったのが②です。条件付きの自己肯定感しかもてなくなると、子どもはほめられたときにしか自分を認められず、逆にほめられないと自分に自信がもてなくなってしまいます。もし子どもの行いや成績が悪かったとしても、まずは愛情をもって接してあげることが大事なんです。この、いつでも愛情をもって子どもと接する「無条件子育て」を行う上で重要なのが、本書の主題となっている「ほめ方と叱り方に気をつける」ことにつながってきますので、ここからはほめ方の種類とポイントについてご紹介します。

大きく分けて、ほめ方には3種類あります。

- ①おごなりほめ
 どういうところがどういうふうによかったのか具体的に欠ける、中身の無い表面的なほめ方をする
 「すごいね!」「上手!」
- ②人中心ほめ
 性格（優しさ・気遣いなど）・能力（頭の良さ・足の速さなど）・外見（顔・体形など）といった、表面上の特徴を中心にほめる

「優しいね」「頭がいいね」「かわいいね」

- ③プロセスほめ
 努力・過程・試行錯誤した手順を中心にほめる
 「がんばって最後までやりきったね」「失敗してもあきらめなかったね」「いろんな方法を試したね」

冒頭のクイズの答え合わせですが、Aが①のおごなりほめ、BとCが②の人中心ほめに該当します。③のプロセスほめを行うことで、子どもは努力するプロセスを楽しめるようになる一方、おごなりほめと人中心ほめには以下の4つの問題があります。

- ①「ほめられ依存症」になる
 ほめられないと自信がもてず、外部からの承認でしか自分の価値を見いだせなくなる
- ②興味を失う
 ほめられるためだけに行動するようになり、せっかく楽しいと思っていたことにも意義を感じなくなる
- ③チャレンジ精神が低下する
 周囲からの評価が下がることを恐れ、失敗を避けるためにチャレンジすることを躊躇するようになる
- ④モチベーションが低下する
 努力の有無にかかわらずいつも「上手!」と言われると、子どもはがんばらなくてもよいと思うようになり、努力をして何かを成し遂げることの必要性を感じなくなる

私も自分の子どもをほめる際、結果や見えていることだけに目を当ててしまうことがしょっちゅうです。今後は、「朝早く起きて勉強してたからいい点とれたんやな!」とか、「この問題結構難しいけど、どうやって勉強したん?」などと、プロセスに目を当てたほめ方、接し方を心掛けたいものです。

今回は「叱り方」にスポットを当てて見ていきます。筆者によると「子育てにおいて、上手に叱るというのは、上手にほめることよりも難しい」とのことですので、こちらについてもぜひ楽しみにお待ちいただけますと幸いです。

（出典）

島村華子「モンテッソーリ教育・レッジョ・エミリア教育を知り尽くしたオックスフォード児童発達学博士が語る 自分でできる子に育つ ほめ方 叱り方」、株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン

出版社HP：

<https://d21.co.jp/book/detail/978-4-7993-2599-5>



記事をお読みいただきましたご感想や企画記事のご提案等、何でも結構ですので、コメントをお待ちしております。

コメントはこちらから ▶▶▶▶▶

